

身延山久遠寺研究

-近代和風建築調査による分析-

Keywords

身延山久遠寺 日蓮宗
堂宇 火災 八脚門

1. 研究背景・目的

身延山久遠寺は山梨県南巨摩郡身延町にある日蓮宗の総本山である。文永11年(1274)の開山以来、久遠寺はたびたび火災に遭っており、現在建っている堂宇は明治以降に建て直されたものが多い。そこで本研究は現在建つ近代以降の堂宇、主に祖師堂・思親閣仁王門を対象に日蓮宗寺院建築の特は何か分析・考察することを目的とする。

2. 研究方法

- (1) 身延山久遠寺にて寺院群の実測調査を行う。
- (2) (1)より平面図等図面を作成及び史料収集を行う。
- (3) 史料、絵図並びに先行論文の分析を行う。
- (4) 焼失前の諸堂宇の絵図等を入手し、3D復原を行い(2)(3)より考察する。

2.1 実測・史料調査

実測調査日：2014年3月20～22日

所在地：山梨県南巨摩郡身延町3567ほか

調査対象：祖師堂、仏殿納牌堂、法喜堂、大客殿、御真骨堂拝殿、旧書院、新書院、太子堂、三門、甘露門、思親閣仁王門、大鐘楼、時鐘、祖廟塔、常唱堂、大荒行堂尊神堂、瑞門、水行堂、信行道場大講堂、本地堂、計20棟

実測調査日：2014年12月26日

所在地：山梨県南巨摩郡身延町下山279ほか

調査対象：法喜山 上沢寺、身延山 久遠寺釈迦殿(本師堂)

史料調査日：2014年11月15日

所在地：山梨県甲州市塩山 石川工務所

調査対象：下山大工絵図、古文書

3. 身延山久遠寺概要

3.1 日蓮について

日蓮は貞応元年(1222)安房国に生まれ12歳の時に清澄山に登り、16歳で出家し是聖房蓮長へと名を改めた。18歳の延応元年(1239)から比叡山に遊学して京都・奈良・高野山・四天王寺などの諸大寺において研鑽している。

その結果、釈迦一代50年間の教説の中で、法華経が最

高の經典であるとの確信を抱くにいたった。そして、仏教の正統は釈迦一天台一伝教というように、法華経を中心とする仏教の伝承の基本的な捉え方に基づき、天台大師、伝教大師を尊敬し、その後の日蓮の教義を確立していった。そして、波木井六郎実長の招きにより身延山に入った。身延山に庵を営んだ日蓮は著述・弟子や檀越の指導をしているが弘安5年(1282)身延山をたち、武蔵国池上に住む池上宗仲の館で入滅した。

3.2 身延山久遠寺について

身延山久遠寺は山梨県南巨摩郡身延町にある日蓮宗総本山である。日蓮は文永11年(1274)に身延山に入り、西谷に三間四面の草庵を構え開創した。日蓮は弘安5年に入滅、遺骨は身延山に奉られている。その後、久遠寺は教団の本拠地となる。運営は輪番制、常住持制と変化していった。西谷から現今の地へ移転を計り、文明7年(1475)ごろ完成させたが、その後、たびたび火災の被害にあう。

火災については明治8年(1875)に起きたものが身延山中最大のものになった。西谷本種坊からでた火は全山に猛火をふるい、本堂、祖師堂など本院諸堂75棟を塵灰となし、なお支院、町屋にもその類を及ぼして都合144棟の堂宇を焼失した。

表1 身延山久遠寺の火災

文永11年(1274)	日蓮が身延山に入り開創
弘安4年(1281)	十間四面の大坊が落成
延享4年(1747)	下之坊から出火。11ヵ坊が焼失
文政4年(1821)	御廟八角堂が焼失
文政7年(1821)	祖師堂より出火、多数の堂宇を焼失
文政12年(1829)	五重塔から出火、28棟の堂宇焼失
明治8年(1875)	西谷から出火、144棟の堂宇焼失

4. 諸堂宇について

4.1 祖師堂

明治14年(1882)移築上棟。大本堂の東脇に建つ特に大規模の撞木造の佛堂である。既存の祖師堂は明治大火により焼失、倉妙本寺に保存されていた、雑司ヶ谷感応寺本堂を解体した際に出た柱、高梁、彫物などを買い取り、



AK11096 幡野 諒



図1 日蓮

移築再建した。なお内陣部分は新築建立されている。外観は妻入とし、正面と側面2箇所の各妻飾は二重虹梁、大瓶束、墓股、飾金具などが大きな妻を飾る。向拝は多くの丸彫で仕上げられた渦彫刻を朱塗や彩色塗、飾金具で装飾し、内部は外陣、広い中陣・内陣・内々陣・後陣と両脇が入側となり、いずれも畳敷の広い空間となる。柱は金箔押、軸部に朱塗や彫刻欄間で飾る。内外ともに装飾のある大建築である

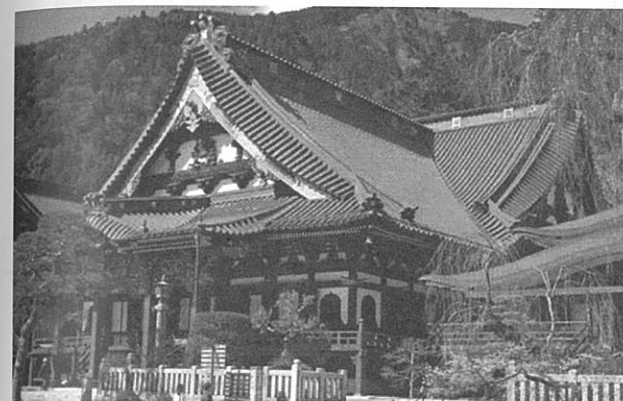


写真1 祖師堂外観

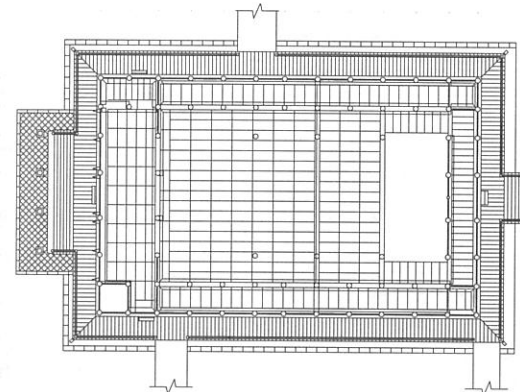


図2 祖師堂平面図

4.2 御真骨堂及び拝殿

棟梁は池上伊織宗治。御真骨堂の始まりは、慶長13年(1608)前田家の養珠院が建立したものである。梁間5間に桁行6間の拝殿から廊下をつたって御真骨堂に入る。御真骨堂は八角堂建築で外部は白壁の土蔵造りである。室内には日蓮の御真骨が安置されている。拝殿の外観は平入、三方に縁・高欄を巡らして正面の入口に軒唐破風の向拝が付く。内部は外陣・内陣とも畳敷で、中央後方の広い一間は御真骨堂と長い廊下で繋ぐ。全体は朱塗とし、軒廻りは組物と彫刻で飾っている。



写真3 御真骨堂拝殿外観

写真4 御真骨堂拝殿内観

4.3 思親閣仁王門

身延山三門から50丁、海拔1148メートルの、身延の嶺とよばれる身延山頂にある身延山の奥之院である。思親閣・大孝庵と称される。思親とは日蓮聖人の親を思う気持ち、大孝とは両親・師への至孝の念を記念したものである。昭和14年(1939)建立。桁行3間、梁間2間、三間一戸の八脚門である。やや大振りの八脚門で、中央は通路、両側の前間は下方に金剛垣、上部を格子戸で間仕切り、内部は土間床のみである。後方の間は床板張りの壇(納仏施設)がある。両側面と背後は羽目板壁で、飛貫位置は内外ともに絵様彫刻のある虹梁を巡らしている。軒は出組の組物と支輪で飾り、二軒繁垂木とする。切妻造の妻飾は二重虹梁と墓股、破風の下は棟・降懸魚で飾る。



写真2 思親閣仁王門外観

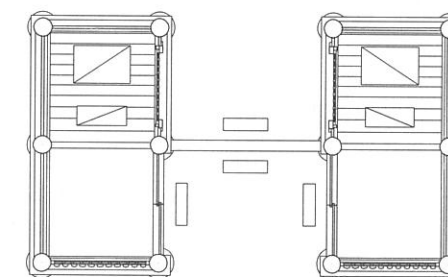


図3 思親閣仁王門平面図

4.4 本師堂

もとは西谷にあった西谷檀林というかつての僧侶の教育機関(学校)の大講堂として使用されていた堂宇で、寛文9年(1669)に建立されたものである。間口9間、奥行7間半。学徒の数約五百人を常住せしめた檀林の堂宇十数棟のうち、最も神聖かつ重要な地位を占めたのがこの大講堂であった。明治7年(1874)11月、学校令によって西谷檀林は廃止となりその堂宇は不要になったが、同8年(1875)久遠寺が大火に見舞われるや現在の仏殿納牌堂の地に講堂は移転され、同14年(1881)今の棲神閣祖師堂が完成するまで一時祖師堂の役目を果たしていた。

町指定文化財ともなっていた本師堂は、昭和54年(1979)4月、建立されてより310年を経て今の大本堂の建立に伴って解体されたが、その内陣荘厳具は現在の釈迦殿にそのまま移されている。



写真5 本師堂外観(昭和29年撮影)

表2 本師堂及び位牌堂の変遷

年号	本師堂	位牌堂
寛文9年 (1669)	西谷檀林の大講堂として建立	
嘉永7年 (1854)		西谷本行坊の客殿として建立
明治8年 (1875)	今の仏殿納牌堂の地に講堂は移転され、仮祖師堂として使用	もと大方丈の地へ引き移し、御真骨仮殿として使用
14年 (1881)	釈迦牟尼仏を奉祀する釈迦堂となる	御真骨堂が落成したことで位牌堂として使用
昭和4年 (1929)	今の仏殿納牌堂の建立に伴い鷲谷寮の跡地に引き移される	現在の仏殿納牌堂建立に伴って大客殿前庭に移転
7年 (1932)		町民共同墓地に移転。
12年 (1937)	祖師堂の西側へと移され、奥殿が増築される	
14年 (1939)	名前を新たに本師堂として開堂入仏落慶式が執り行われる	
27年(推定) (1952)		上沢寺が本堂として貰い受けて移転
54年 (1979)	今の大本堂の建立に伴って解体された。内陣莊嚴具は現在の釈迦殿に移された	

4. 5旧位牌堂

もとは西谷本行坊の客殿として嘉永7年(1854)に建立された。明治8年(1875)の大火後、もと大方丈の地へ引き移し、御真骨堂が完成(明治14年3月23日落成)するまでの御真骨仮殿として使用した。堂宇の規模は桁行八間二尺に梁間六間一尺で、屋根は元々柿板葺だったのを移転時に土瓦に改めた。御真骨堂が落成すると位牌堂として使用した。その後、移転を繰り返し、用途も変化していき、最終的に昭和27年(1952)に上沢寺が貰い受けその本堂として使用、現在に至る。



写真6 位牌堂(現 上沢寺本堂)

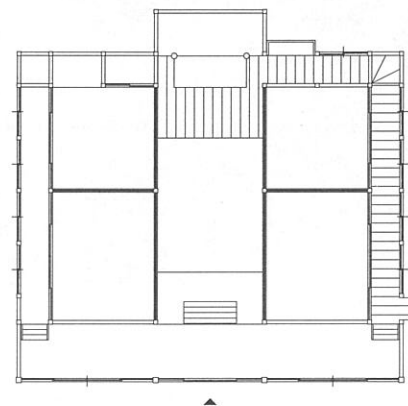


図4 位牌堂平面図

5. 考察

5.1本師堂及び祖師堂の形態

本師堂は明治8年(1875)の大火の後、仮の祖師堂としての役割を果たした。祖師堂が完成すると、移転を繰り返し現在の大本堂が建っている場所で本堂の役割も果たしていた。本師堂は間口9間、奥行7間半の平入りの堂宇である。本師堂が解体され、昭和57年(1982)に竹中工務店によりSRC造と木造の大本堂が建設される。大本堂は間口17間半、奥行28間となっており、間口は本師堂の約2倍、奥行きは約4倍と長堂形式の堂宇となっている。また、日蓮宗において最も重要な堂宇である棲神閣祖師堂も梁間12間、桁行20間の長堂形式である。この2棟の主要堂宇が長堂であるのは、本師堂のような正方形に近い比較的小さな堂宇では、時代が経つにつれ増加した参拝者を堂内に収めきることがないので、外陣を伸ばし対応した結果であると考えられる。



写真7 大本堂外観

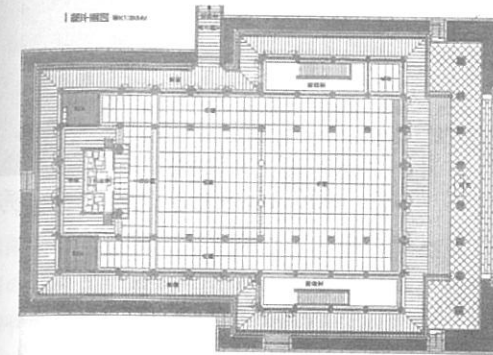


図4 大本堂平面図

5.2思親閣仁王門の様式

表3 八脚門の様式

初期	中期	後期
雲峰寺仁王門(室町後期)	富士浅間神社隨身門(1736)	穴切大神社隨身門(1794)

山梨県内における八脚門の変遷を辿ると、初期様式は控柱8本、全面を壁で囲い、内部に仁王像を配置していた。例として、雲峰寺仁王門(室町後期)がある。時代が進むにつれ、交通網の整備などにより、参拝者が増加する。八脚門は前面と側面の壁を取り除き参拝者が通行しやすい様式へと変化していく。これを中期様式とする(表3参照)。例として、富士浅間神社隨身門(1736)がある。後期様式になると、前面の中央の柱2本も取り除き、虹梁で持たせる構造に変化する。より参拝者が通行しやすい様式である。例として、穴切大神社隨身門(1794)が

ある。思親閣仁王門の平面図(図3参照)を見ると、本柱4本、控柱8本の八脚門だということがわかる。この仁王門は昭和10年(1935)に再建されたものであるが、八脚門の様式では初期様式に当てはまる。これは時代を遡った様式であり思親閣仁王門は復古調であると言える。

6. 3D復原

本師堂と旧位牌堂の2棟について3D復原を行った。本師堂については数枚の古写真から、旧位牌堂は移築先である上沢寺での実測調査によって作成した図面(図4参照)をもとに立ち上げた。

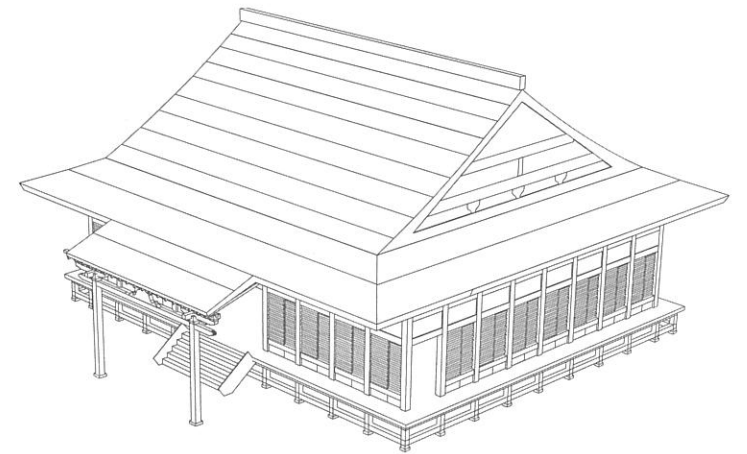


図5 本師堂外観パース

7. 総括

身延山久遠寺は13世紀の開闢以来日蓮宗の総本山として壮大な伽藍を現代まで維持していきだが、その歴史は明治大火により一度清算されている。その大火によって主要堂宇が焼失したが、別の堂宇を移築し仮堂として使用することで難を逃れてきた。本堂・祖師堂などの主要堂宇は再建するにあたり、参拝者を多く収めるため長堂形式に変化していった。位牌堂は用途が客殿、御真骨堂、仮殿、位牌堂、共同墓地の堂宇、上沢寺本堂と様々に変化している。ここから日蓮宗は堂宇に対して拘りがなく、その精神性、機能性を建築そのものに依存しないと言えるだろう。また、久遠寺の仁王門については再建年代の八脚門の流行とは異なった初期様式の復古調で再建されており、久遠寺独自の建築と言える。

参考文献

- 「身延山久遠寺史研究」林是晋、平楽寺書店、1994年
- 丹羽博亨「日蓮の教義と行儀と伽藍観」
日本建築学会論文報告集 第343号、1984年
- 丹羽博亨「直弟子に見る日蓮の伽藍観の継承と発展」
日本建築学会論文報告集 第347号、1985年
- 身延山久遠寺公式ウェブサイト
<http://www.kuonji.jp/index.htm>
- 「日蓮寺院の建築」藤島玄治郎、雄山閣、1936年
- 「身延山史」久遠寺編、1973年
- 「続身延山史」久遠寺編、1973年